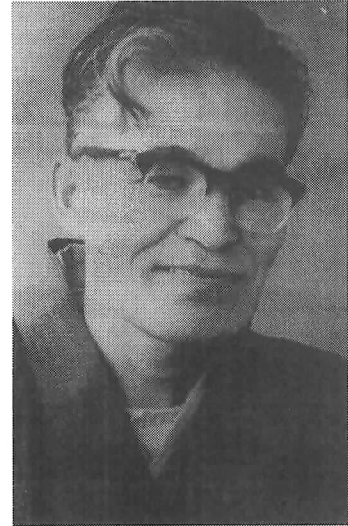
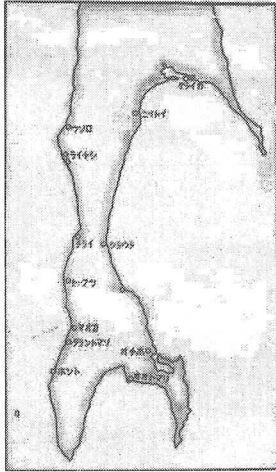




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樺太時代の知里先生
Author(s)	山口, 真
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」. 平成21年2月22日. 札幌市.
Citation	知里真志保 人と学問 : 生誕百周年記念シンポジウム予稿集, 38-53
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38289
Type	conference paper
File Information	6_38-53.pdf





樺太時代の知里先生

山口 真

知里真志保博士は、稀に見る博識の人であつたばかりでなく、
人として離れがたい魅力の持ち主であつた。
科学については、類まれなる天分にめぐまれていたのみならず、
至誠の人であつた。
氏のような人が本当に、かけがえのない人であつたと
私は信じている。

「アイヌ 民族誌と知里真志保さんの思い出」より

湊 正雄

北海道大学名誉教授

はじめに

知里先生が樺太庁立豊原高等女学校で教鞭を執る傍ら、樺太アイヌ語の語彙採集のフィールド・ワークをされたのが昭和15年7月～18年6月までの2年8か月であつた。先生は31歳。当時樺太は樺太アイヌ人を含む先住民族、ロシア革命により追われたロシア人、ポーランド人、明治43年、韓国併合により〔臣民〕として日本国籍になり移住してきた朝鮮人、明治38年日露戦争後日本の殖民地政策により内地からの移住者の多民族社会であつた。私達はこの内地から移住した人々の2世にあたる。

知里先生は昭和14年東京帝国大学大学院言語学専攻を退学しての渡樺だった。当時幅を利かせていた間違つたアイヌ学会への不満、金田一のアイヌ研究への抵抗感、アイヌ研究で金田一を超えるための研究には樺太アイヌにいどまなければならなかったと「天才アイヌ人学者の生涯知里真志保評伝」の著者藤本英夫氏は分析する。

1. その頃の樺太

日本統治下の樺太は水産資源から森林、パルプ、石炭へと主要な資源をもとに発展してき

た。昭和10年代の樺太は領有、開拓の30年を経て、さらなる発展を目指した年月であった。その当時の意気込みは樺太島歌(作詞本間一咲、作曲山田耕作)に象徴的にあらわれている。樺太は企業の島であり、第1次大戦により、欧州、アメリカ、東洋の海運が途絶えたため、東洋で必要な紙はすべて日本で製造し、パルプの値上がりは膨大な利益を生んだ。真岡(製紙)恵須取(新聞用紙)落合(パルプ・クラフトペーパー)知取(グランドパルプ)そして豊原、敷香等次々に工場が建設されていった。私は戦後の開発途上国の工業化の開発モデルだと思っていた。

蒼波湧きて風は光れり
揚げよ今 撥刺の強き眉
起ちて共に 隆々の国威に副はむ見よ海幸の恵は溢れ
オホーツクの潮と轟く
伸びゆく 楽土伸びゆく 楽土
おお我等が樺太
大地は晴れてみどり明れり
振え今 雄揮の強き腕
起ちて共に 豊かなる宝庫拓かむ見よ黒土は氷を弾き
芳潤の木肌香ぐはし
栄ゆく 楽土栄ゆく 楽土
おお我等が樺太
北斗は冴えて山河遥けし
張れよ今烈々の強き胸
起ちて共に 聖明の厚きに副はむ見よサガレンの往時を夢に
清新の文化華咲く
希望の楽土希望の楽土
おお我等が樺太

昭和13年 国家総動員法発令総力戦体制
昭和13年12月 厚生省設置によって、女子は人的資源の培養 優良多子家庭表彰
女子体力章検定全国で実施(1000m速行 縄跳び短棒投げ、重量運搬)
昭和16年12月 太平洋戦争(第2次世界大戦)始まる 開戦以来3ヶ月戦果すばらしかった。
シンガポール陥落
昭和17年4月 日本本土初空襲(東京)
昭和18年9月 一億総動員令女子挺身隊

このような時期知里先生は昭和15年7月、樺太庁立豊原高等女学校に赴任された。

知里先生が樺太庁豊原高等女学校の教師となったのは、室蘭中学校時代の恩師福山惟吉先生の呼びかけによるものであった。福山先生は、植物学者であり、当時豊原高女の校長、優秀な教師を捜していた。その傍ら隣接する樺太庁博物館の運営委員もつとめていた。当時樺太では中等学校の教員が不足しており、知里先生は英語・国語を教えてほしい、研究の時間は充分ある。それに給与の約五割増の樺太加俸があるという条件であった。

昭和15年はまた皇記2600年の記念すべき年であった。樺太庁立豊原高等女学校の上級生、福原英子さんは樺太女子中等学校生徒代表として、福山惟吉校長と共に11月10日宮城外苑

で行われた紀元2600年式典に参加した。私達は「奉祝国民歌紀元2600年」を盛んに歌い、日本に生まれた幸せを喜んだ。

金鶏輝く日本のしっかと我等踏みしめて
いまこそ祝えこの朝
紀元は二千六百年
あゝ 一億の胸は鳴る

歡喜あふるる、この土を榮ある光身にうけて
はるかに仰ぐ大御言
紀元は二千六百年
あゝ 神肇國の雲青し

荒ぶ世界に唯一つ
櫻と富士の影織りて 感謝は清き火と燃えて
紀元は二千六百年
あゝ 報國の血は勇む

潮ゆたけき海原に
揺がぬ御代に生ひ立ちし 世紀の文化また新
紀元は二千六百年
あゝ 燦爛のこの國威

正義凜たる旗の下
明朗アジアうち建てむ 力と意氣を示せ今
紀元は二千六百年
あゝ 彌榮の日は昇る

太平洋戦争が始まったのは昭和16年12月8日であった。北国のどんよりと曇った冬の日、早朝大本営発表の臨時ニュース「大本営陸海軍部発表。本、12月8日未明、散米英と交戦状態に入れり」が軍艦マーチと共に耳に突然入ってきた。この日は興奮さめやらず、臨時ニュースと軍艦マーチが一日中何度も何度も繰り返されて放送され、はやる心を押さえて聞き入った。国民の挙国一致、戦意高揚のためだった。私達は樺太庁立豊原高等女学校の一年生、13歳の冬であった。クラス担任は知里先生。

人口は昭和16年12月末で、総数406,557人、豊原市は37,160人、日露戦争直後明治39年末の人口の約33倍、人口が最も著しく伸びたのは昭和10年以後であった。
先住民族はオロッコ、ニフブン、キーリン、サンダー、ヤクーツ計278人。樺太アイヌは昭和8年1月樺太施行法律特例の改正により日本人に編入されたため記載されていないが、大野東雲著「樺太地誌」によれば昭和7年度末に1,474人のアイヌ人がおり、うち豊原297人、真岡451人、泊居331人、敷香219人に散在していた。そしてアイヌ人以外の先住民族はすべて敷香近くの「オタスの杜」に集住させられた。

2. 知里先生と樺太庁豊原高等女学校26期菊組との出会い

知里先生は昭和15年7月3日、豊原高等女学校の国語と英語の先生として単身樺太に渡って

こられた。多くの樺太勤務をする人は当時厳寒の樺太で家族が生活できるかどうかを確かめた上で家族を呼び寄せる習慣があった。先生は私達の入学よりもより9ヶ月早く赴任されていた。



豊原高等女学校2年菊組 昭和17年

昭和10年から樺太はすばらしい発展をとげ人口が急増し、昭和16年度から1クラス増設、今まであった松、竹、梅、蘭の4クラスに私達の菊組が加わった。クラス担任は知里真志保先生、生徒は53人。

私達の入学は昭和16年4月9日であった。私達の担任として颯爽として、知里先生が私達新入生の前に現れたのは春の陽射しが美しく教室を照らしていた朝であったと鮮明に記憶している。生徒達の第一印象は陰気で近寄りがたいというのとおしゃれなスマートな32歳の魅力的な紳士の二つに分かれていた。

豊原高等女学校は日露戦争後樺太が日本の領有となってから最初に創立された大正5年創立の4年制名門高等女学校であった。雪深い全島から優秀な生徒が集まった。そのため第1寄宿舍、第3寄宿舍と大きな寄宿舍が2棟あり、13歳から17歳の少女が勉学に励んでいた。生徒定員は昭和16年4月950名。

3. 樺太豊原高等女学校の戦時教育と知里先生の授業

戦前戦中にかけて日本の学校では奉安殿に天皇、皇后のご真影と教育勅語がおさめられていた。学校で最も聖域とされていた。新年、紀元節、天長節、明治節の四大節祝賀式典には職員生徒全員でご真影に対しての最敬礼と教育勅語の奉読が行われた。登下校時や単に前を通るときにも職員生徒は最敬礼をするように定められていた。奉安殿は当時の皇国史



奉安殿と校章

観と教育のシンボルであった。

近代日本の女子教育は明治国家が提唱した「良妻賢母」主義教育であった。昭和に入ってから「靖国の妻」、「軍国の母」が強要されるようになった。

豊原高等女学校の講堂には太平記で有名な「桜井の別れ」の日本画と短歌が正面に大きな額に入れられて朝夕生徒は忠君の思想と昭和の聖代に生をうけた臣民の天皇崇拜と国家への奉公を教えられた。

御民われ生けるしるしあり天地のさかゆるときにあえらく思えば

昭和16年1月、戦時下の女学生標準制服が決定し、4月から女学生の制服はセーラー服ではなくて、へちま襟、紺ステープルファイバーのサージのツーピースに変わった。スカートは4枚

接ぎセミプレーヤーで裾まわり180糎以上と決められていた。多くの女学生はセーラー服に憧れていたのだが、この服を着始めると「バス・ガール」のあだ名がついた。昭和18年2月、「米英摸倣主義を一掃して、女子学生のスカートはすべてモンペにする」という布告が商工省からでた。そこでスカートはモンペに変わった。

(全校学校行事)

学校行事のなかで重要視されたのは皇国史観と結びついた神道であった。別格官幣大社樺太神社は樺太の神社の中心であったので、私達女学生は何かあると樺太神社へ勤労奉仕にいった。私達の勤労奉仕は先ず4日間の樺太神社外苑勤労奉仕から始まった。8月23日の樺太神社祭には、全校参拝また豊原高等女学校から6名が浦安の舞を舞って奉仕奉納、その他にも七月七日護国神社の例大祭に浦安の舞を奉納。

7月7日の支那事変4周年記念日には記念式、樺太神社参拝、観閲式、街頭行進を行った。観閲式は軍隊の分列行進と同じ。校長の前で各小隊「頭右」、過ぎると「直れ」。知里先生は何時も私達の小隊の後ろでにやにやしながら見守っていた。

9月10日、フレップの葉の採集を兼ねて遠足。フレップの葉は利尿剤になるというので勤労奉仕。

[戦時中の授業内容]

太平洋戦争以降女学校の授業内容も変わった。歴史は日本史、東洋史すべて皇国史観を根本として考える。日本史は天照大神の天孫降臨から始まった。天照大神の「天の岩戸」、「天孫降臨」や神武天皇の「金鶏」の物語など神話としてきっちり教えていたならば理解も出来たろうに、少しでも科学を学んだ少女にとっては信じられないことであった。それでも国体の本源を体認させるために5大神勅を選び、毎週初の国語と歴史の時間始めに生徒に一齐に奉唱させた。太平洋戦争では「八紘一字」が戦争の大義名分として利用された。

神武天皇東征の神話に「八紘一字」（八紘をおおいて宇いえとなす）という言葉があった。太平洋戦争では、東アジア諸国を覆う、いわゆる「大東和共栄圏」をつくり、日本はその盟主となる意味であった。

変わった音楽

音楽の教科内容からドレミファと敵国米菓の歌である「蛍の光」、「埴宿」、「故郷の廃家」、「スワニー河」が消えた。その代わりに敵機と友軍機を聞き分けるための絶対音感教育が国防上必要であるということで、ドイツ語のツエゲ、ツエファ、ハデゲが教えられた。「流浪の民」「ドナウ河のさざなみ」などは残った。

消えた敵国の英語

2年生までは教えられたが、3年以降は授業数が減少。英語教員は数学を教えた。

精神錬成のための体育

体操は従来の体操から精神的錬成に重点が置かれ、武士道による薙刀、太刀、弓が教科で教えられるようになった。練習用の弓道の的は麦藁で作られた敵国のチャーチル首相やルーズベルト大統領の顔であった。軍事教練も行われ、モールス記号、手旗信号、最後には銃剣術まで授業の中にはいつてきた。

重点が置かれた裁縫

裁縫は和裁、洋裁、手芸に分けられて重点がおかれ、特に和裁は合せの着物、羽織まで縫い上げた。

その他

戦時下の女子教育には集団保育、戦時救護の技術が特に必要とされ、教員であった母は研修のために1か月間北海道大学で研修をうけた。

[知里先生の授業]

知里先生はきびしかったと多くのクラスメートは言う。忘れ物をしては「えんま帳」、休み時間に遊びすぎたといって叱られ、掃除用品を忘れた、気をつけの時に動いたといっでは叱られた。先生の発音がおかしいといっでは叱られお説教となった。でも先生の授業は楽しかった。

当時私達は1年生で、先生から国語と国文法を教わった。先生の授業は格調が高く、厳しく緊張したものだった。一回目の授業から英語を混じえた授業だった。意味など解するわけがない。教科書ぬきの文学を掘り下げた授業だったので、半分解らないながらも良い講義を受けたとあるクラスメートは語る。

国語の時間、字句の解釈などはせず、若山牧水の作品がでてくるとお酒の好きだった知里先生は黒板に「白玉のしみとおる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」などお書いて説明した。そのうち各自の好きな詩を発表させ、朗読、暗調させた。

カールブッセの山のあなた「山のあなたの空遠く 幸住むと人のいふ。ああ 我ひと尋

めゆきて、涙さしぐみかえりきぬ。山のあなたのなほ遠く 幸住むと人のいふ」上田敏の名訳「晦潮音」をすらすらと黒板に一杯書いて教えてくださった。この時代はロマンティックな詩や歌は禁止。夢のような憧れを私達の心に灯してくださった時、ほんとうに「山のかなた」の幸せを信じた。

ポール ヴェルレーヌの落葉、「秋の日の ヴィオロンの ため息の 身にしみて うら悲し。鐘の音に 胸ふさぎ 色変えて 涙ぐむ 過ぎし日の 思い出や。げにわれは うらぶれて ここかしこ さだめなく 飛び散らふ 落葉かな」も知里先生と共に懐かしい。快い響きになって私達の乙女こころにしみじみとしみいるのでした。

菊池寛の作品が出てくると菊池寛の小説「真珠夫人」や「第二の接吻」を読んでもみようとおっしゃった。夏目漱石の「虞美人草」もそうであった。小学校6年を終わったばかりの少女は、おとなの世界へ追い上げられるような気持ちと、興味津津で、親にかくれて読んだものだ。しかし、これで私たちは、文学の楽しさとその世界を知った。

いつも教科書にない、何かを教えてください。ウィットに富み、ユーモア混じりの楽しい講義だった。フランス語の「ウィ」の発音は酔っ払いの発する「ウィ」と言うあの感じだとか、思わず笑いを誘う授業であった。きびしい戦時中であることをしばし忘れさせてくれるひと時だった。

国語の教科書でも「教科書だからといってすべて立派な文章とは限らない」と実例をあげて批判することも教えた。私が現在でも、斜に構え、常識とされていることを一応疑ってかかる習慣があるのも、知里先生の影響かもしれない。

国文法の時間も楽しかった。初めての時間、知里先生はクラス全員に片っ端から「空はきれい」と言わせた。私を除いて全員「空はきれい」ときれいときところにアクセントをおいて返事をした。私だけが「空はきれいのいところにアクセントのあることを知った。私は岡山弁であったのである。私達はこれで日本語にあるアクセントとイントネーションを学んだ。このことは後の外国語学習に役立った。

また中国では北京の人の話すことは広東では通じないとも話した。広大な地域では同じ国の人でも通じないとも話した。そのため政府は標準語を定めており、それを使うのだとも話していた。言語の多様性と言語政策のことだったと後になって気がついた。

国文法は法則を教え、徹底して練習問題、それも、当時入試がむずかしいといわれた一高や有名校の問題をやらせた。おかげで私たちは、男子校であるので入学することはできなかったが、国文法だけは自信があった。

歴史について知里先生は日本民族がどこからきたのか。天孫降臨ではない。南方から北方から移住してきたのであると文化人類学的に教えた。私はいつも世界地図を頭に描いて朔北の樺太から世界を見ていた。

知里先生は豊原高女時代、昭和16年始めて創設された菊組の担任となった。上級生のいないこのクラスにはクラスの伝統はなかった。「クラスの伝統をつくるのは君たちだ。一丸になってことにあたるように」と指導した。2年生になって私は組長になった。私は4班あった班長を隣の樺太庁博物館の前庭に集め、芝生に腰をおろして「このままでは逆流にさ

からうもの。どうすればよいか」と相談会を開いたという。結論はみんなで一生懸命頑張って全校の模範になるようなクラスにしようというのが結論だった。運動会にしろ、弓道大会にしろ一番になることが目標となった。戦後、毎回の同窓会で参加者の一番多いのは26期菊組である。

日本の学校には当時、必ずといってよいほど、二宮金次郎が柴を背負って読書しながら山を下りてくる銅像が、勉学のシンボルとして校庭にあった。知里先生は、勉学というものはあんな中途半端な姿勢では能率が上がらないときびしかった。

教科書にオリンピックのことが出てきたとき、人見絹枝嬢のことを話してくださった。スウェーデンでの国際陸上競技大会で、日本女性として初めて優勝した彼女が、外人選手はゴールで大の字になって倒れたが、人見嬢だけはつつましくうつつ伏せて倒れたとか。我々から見ると男か女か分からないように見えるが、さすが大和撫子と褒めていた。

知里先生は19歳で早く亡くなった9歳上の姉の幸恵さんのことをいとおしく、よく話された。幸恵さんは教養あるアイヌきっての立派な女性で、アイヌの叙事詩、神謡集そのものも素晴らしいが、とりわけその序文に秘められたアイヌ民族の誇りと伝統、滅びゆく民族の偲びがたい哀れみと苦しみは叙事詩以上に私は感動をもって読み返した。

菊組の信望はあつかった。知里先生が北大に行かれると聞かされ、別離のつらさにみんな泣いた。先生は私達に何度となくおっしゃった。「Boys be ambitiousという言葉があるがね、君たちは結婚についてもこの言葉を忘れちゃいけないよ」と。

私は知里先生の研究論文を雪道、郵便局へ運んだこともある。ちょっと見ると宛名は金田一京助先生ではないか。あっ、あの私たちの国語副読本「心の小径」の作者の金田一京助先生だという感激とはずむ心は、今でも忘れることはできない。

戦争が拡大、きびしくなるにつれ女学校も戦時色をつよめて行った。まず校友会は報国会と名称を変え、9月18日には報国隊の結成式が行われ、臨戦下に相応しい体制をととのえた。10月12日から全国的に防空訓練が行われ、学校もそれに即応して実践訓練をおこなった。防空監視、校内外の警備、特に焼夷弾に対する防火措置、救護、待避、避難、非常登校、伝令、搬出など各分野にわたって訓練がおこなわれた。

昭和17年1月になると毎月8日に大詔奉戴日が実施されるようになり、全校生徒樺太神社に参拝、戦勝と兵士の武運長久をお祈願、精神を新たにする学校行事が加わった。クラス担任の知里先生はいつも苦笑いしながら菊組の後についてこられていた。

戦時中にもかかわらず、真理を追究する学者らしく、広く世界的な視野から私達を指導した。また学問は内側にある真理をつかむことが大切であることを教えられた。知里先生の格調たかい授業は私達に新しい世界と民族文化への開眼をさせてくださった。

私は戦後大学在学中ユネスコ駐日代表部が長野県菅平高原で日本で初めて開催した「友愛を基調とする国際理解セミナー」に参加し、ユネスコ学生運動を通じて、一生の生き方を決めた。

このように私達は樺太庁立豊原高等女学校では皇国史観に基づく軍国主義のテキストと知

里先生のそれを超えたものの本質を考える二つテキストから学んでいたのである。

先生のニックネームは少ししゃくれた顔から何時の間にか「花王石鹼」となっていた。

4. 樺太博物館でのアイヌ語研究

当時の長官棟居俊一樺太庁長官は文化長官と言われるほど文化化活動に理解を示し、新博物館構想の実現に努力した。昭和15年7月既定を改正、技術員制度を導入した。この日付は知里先生の渡樺と一致する。

技術員制度は各専門部門の資料の蒐集、調査研究、陳列に当たさせた。技術員は5人で、各技術員のテーマは次のとおり。

岡田宣一	樺太における一・二鳥類の食性について
奥山鐘吉	多来加貝塚の考古学的調査
黒澤守	海馬島の地質
西鶴定嘉	樺太の探検と地図の発達
知里真志保	アイヌ語研究;樺太方言を中心として

技術員は無給の非常勤職員であったが、地方研究のための旅費は支給された。

知里先生にとって、最初の就職先であった三省堂の辞書編纂の仕事は研究者として、経済的な保障、将来の研究を保障するものではないと思われたようだ。当時樺太の俸給は本州の一倍半であった。

樺太の教育界は本州から優秀な教員を募集した。昭和12年樺太庁博物館は新館落成とともに植民地経営のための科学を志向していた。妻子をもつ生活のためにも知里先生は一時期を樺太アイヌ研究にかけののである。



樺太庁博物館

樺太の雪解けは4月下旬、初雪は10月中旬に降る。知里先生の樺太における植物語彙採集は約半年間である。当時は豊原高女の夏休みが7月31日～8月21日の約20日間となっていたことを思うと、知里先生の樺太アイヌ語のフィールド・ワークと豊原高女の教鞭がどんなにか多忙であったかが推測されえる。

知里先生の樺太におけるフィールド・ワークはどんなものであったか。
知里先生は当時樺太アイヌ人が集落をつくっていた西海岸のウソロ、ライチシ、チライ、トーフツ、マオカ、タラントマリ、ホントの7地点、東海岸のタライカ、ニイトイ、シラウラ、オチホ、オオトマリの5地点、計12地点で語彙採集を行い、それをもとに金田一京助に論文を送付する傍ら2年8ヶ月の間に次のような研究業績をあげている。知里先生は5万語に及ぶカードを作成し、それを部門別に整理分類している。

樺太庁博物館における研究業績

アイヌ語法研究—樺太方言を中心にして

樺太アイヌの説話

樺太アイヌ語における人体関係名彙和田文治郎と共著

樺太アイヌ語植物名—白浜における調査(上)福山惟吉と共著

知里真志保の指導協力を得て、樺太内の少数民族の実施調査を行い、「北方自然民族民話集成」を昭和43年刊行

樺太庁博物館刊行の出版物とシリーズ「樺太叢書」・「樺太庁博物館」

野村崇・出村文理

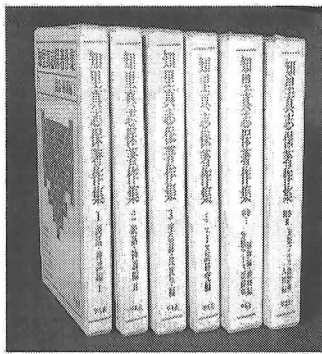
「北方博物館交流」第19号2007年3月

昭和29年11月アイヌ社会にとっては初の文学博士を北大から贈られた。
辞典はまず植物編が昭和28年に刊行され、ついで人体編が29年に出たが、残りの原稿も29年中に全部できあがった。

その後、知里先生は昭和30年度の輝かしい朝日新聞社の朝日賞を授与された。同年1月3日の「朝日新聞」には知里先生とその業績を次のように紹介している。

“自分の民族”への情熱 「アイヌ語辞典」の知里先生

知里真志保氏は北海道登別にアイヌ人として生まれ、一高、東大に学ぶころから「亡びつつあるアイヌ文化」の探究に情熱を注ぎ「民族の言葉」アイヌ語を究めつづけること20年、その後の大集成が「分類アイヌ語辞典」全五巻(日本常民文化研究所)である。アイヌ語については英人ジョン・バチラー博士をはじめ、金田一京助博士などの、先達が早くから研究の途を拓いているが、知里氏は、金田一博士の秀れた門弟の一人として親しくその指導を受けるかたわら、樺太、北海道の奥地をくまなく踏査し、さいはての地に「消えてゆく言葉」の神話、民話、方言を広く採集、そのために樺太の北端豊原に女学校教師となることも辞さなかった。こうしてアイヌ語の語源と、それに付随する民族の感情、信仰、土俗にまでわたって言語学的に、民俗学的に深く広く探求を進める一方、基礎的なアイヌ語文法の研究にも精通して「アイヌ語文法の研究」「母音調和の問題」「助詞の研究」などの論文を発表している。



アイヌ研究はこれまで、研究者自身の所属する文明社会の考え方に基礎をおいたもの、つまり「外から見た」研究であった。が、未開社会における「外からの思惟」を絶した考え方や、アイヌ自身のものの見方に純粹に深く突き入ったのが、知里氏の研究の、他に比類のない特色の一つである。

「分類アイヌ語辞典」全五巻こそは、このように集められ約五万語におよぶ語を部門別に整理分類し、植物編・動物編・人体編・地名編・一般語句編の五冊にまとめられたもので、各編ともそれぞれの部門に属する言葉の使用地、語形、語義を的確に明示すると同時に民俗的に詳

細な解説が付けてあり、その点単なる辞典というよりは、まさにアイヌ社会文化万般の構成と呼んでもよいほどの壮観を呈している。量的に見ただけでも、バチラー博士の集めた二万語をはるかに突破しているが、文字を持たぬアイヌ社会の歴史的発展を解明するに当って、知里氏に幸いしたものは、その天才的な鋭い直感と豊かな総合力に加えて「自分の民族」の過去をさぐる情熱であった。これはアイヌ人たる氏にして初めて成しとげられるものであった。

昭和29年11月、アイヌ社会にとっては初の文学博士を北大から贈られたが、アイヌ人によるアイヌ研究者として、知里氏の実に貴重なものであると言えよう。辞典はまず植物編が昭和28年に刊行され、ついで人体編が29年に出たが、残りの原稿も29年中に全部できあがった。

知里先生の有名な「分類アイヌ語辞典」とはどんなものであったろうか？

知里真志保著作集別巻植物編<昭和51年7月6日 平凡社による>
豊原高女の校章「スズラン」の項目である。

340. スズラン キミカゲソ *Convallaria Keiskei* Miq.

- 1) seta-pukusa (se-tá-pu-ku-sa) 「セタプクサ」 [setá (犬) pukusa (ギョウジャマンニクの葉)] 葉をゆう 【誤別、沙流】
 - 2) seta-kito (se-tá-ki-to) 「セタキト」 [setá (犬) kitó (ギョウジャマンニクの葉)] 葉 【真岡、白渡】
 - (3) sikitonekax (si-ki-to-ne-kax) 「シキトネカハ」 [si (自分を) kitó (ギョウジャマンニクの葉) ne (になら) ka (せる) p (もの), ギョウジャマンニクもどき] 葉 【大泊】
 - (4) chironnupkina (chi-rén-nup-ki-na) 「チロンヌキナ」 [chironnup (狐) kina (草)] 葉 【A 十勝】
 - (5) nupkina (núp-ki-na) 「ヌキナ」 [nup (野) kina (草), おそらく chirónnup-kina がもとの形である] 葉 【A 沙流】
 - (6) nup-pukusa (núp-pu-ku-sa) 「ヌプクサ」 [nup (野) pukusa (ギョウジャマンニクの葉), たぶん chirónnup-pukusa がもとである] 葉 【A 千歳】
- (参考) 葉が似ているくせに食用にならぬとゆうので「大のギョウジャマンニクの葉」とか「キツネのギョウジャマンニクの葉」とか悪口を云ったのである。

知里先生は日頃から「ほんとうのアイヌ」の辞書をつくる。アイヌの生活の反映としての言語をつくる。「言語は社会生活の反映である」とも言っていた。そして生活観の入った辞書を残した。

終戦と私達の引揚げ

昭和20年8月8日ソ連対日宣戦、8月9日ソ連軍樺太国境、半田付近を砲撃侵攻、8月13日ソ連軍の空爆と艦砲射撃により塘路、恵須取市街大火災、住民非難開始、8月15日天皇の戦争終結詔書、8月15日全島に白旗掲揚、8月22日知取町で日ソ停戦協定成立、8月22日ソ連軍豊原駅空爆、9月5日武装解除、日本軍は作業大隊に編入され、1個大隊は北樺太へ、他はシベリアへ船舶移送(約1万3000人)。昭和21年9月26日、10月以降シベリア・樺太から日本人送還の用意ある旨ソ連当局発表、12月5日引揚げ第1船函館入港、12月19日日本人捕虜送還について米ソ協定成立(毎月5万名送還の旨発表)昭和24年7月23日引揚げ打ち切り。

豊原高女26期生は昭和20年3月、17歳で卒業し、第2次世界大戦の最後の激戦地樺太で戦争に巻き込まれ、密航あるいは引揚げ船で北海道の土を踏んだ。その悲惨な物語は聞くも涙、よく帰ってきたねの他言いようがない。クラスメートが言うにはソ連軍が侵攻して来るまでは豊かであった。引揚げ後、何も無いところへ定住するまでの苦労は大変なものだったと異口同音に聞いている。が、楽しい同窓会ではその話は出ない。知里先生は昭和18年6月病気を理由に豊原高女を退職し、幌別町登別に居住。同時に北海道帝国大学北方文化研究室嘱託になった。当時34歳であった。

5. 知里先生が私達に残したもの —同窓の絆・戦後60年の私達

知里先生は豊原高女時代、昭和16年始めて創設された菊組の担任となった。女子生徒53人。上級生のいないこのクラスにはクラスの伝統はなかった。「クラスの伝統をつくるのは君たちだ」と指導した。2年生になって私は組長になった。私は4班あった班長を隣の樺太庁博物館の前庭に集め、芝生に腰をおろして「このままでは逆流にさからうもの。どうすればよいか」と相談会を開いた。結論はみんなで一生懸命頑張って全校の模範になるようなクラスにしようというのであった。運動会でも、弓道大会でも一番になることが目標だった。戦後、毎回の同窓会で参加者の一番多いのは26期菊組であった。

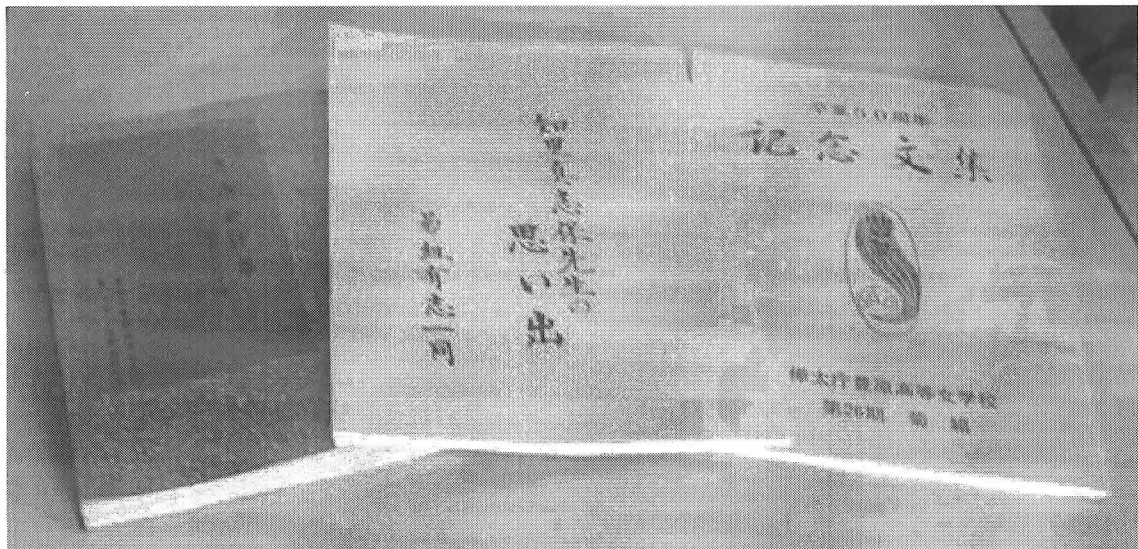
伊藤久子さんは次のような記録を残している

昭和24年1月6日	戦後初めて伊藤さんの食堂「むさしや」で集まった。
昭和26年3月18日	知里先生を囲んでクラス会
昭和36年6月9日	知里先生鬱血性心不全兼心房細動のため斗南病院(札幌)で死去
昭和45年8月	クラス会17名参加
昭和50年8月	卒業30周年記念クラス会、定山溪溪流荘 20名参加、 文集「きみかげ草」作成

昭和51年6月	みちのく旅行（2泊3日）17名参加
昭和52年6月	知里先生17回忌、札幌 24名参加
昭和53年6月	50歳記念京都旅行（2泊3日）16名参加
昭和55年10月10日	登別資料館に知里真志保展示部が出来たのを記念して1泊同窓会、 虎杖浜「ホテルいつみ」12名参加、資料館へは24名見学
昭和58年6月	知里先生23回忌と55歳記念クラス会 札幌石狩会館で1泊 30名参加
昭和62年6	還暦記念東北旅行2泊3日 22名参加
平成7年	卒業50周年記念クラス会 札幌 22名参加
平成19年6月	傘壽の集い 秋保温泉 仙台 13名参加

東京では昭和60年から、毎年7月の「ほうずき市」、12月の「羽子板市」に5～6名集まり、浅草寺にお参りし、現在も続いている。

豊原高等女学校の思い出文集として私達は「きみかげ草」、「知里先生の思い出」、「卒業50周年記念文集」を作成している。



卒業30周年記念 「きみかげ草」の作成

昭和50年8月4日、定山溪溪流荘に20人集まった。

私はこの日みんなの寄せ書きの色紙に次の拙文をよせた。

今は異国の地、樺太の豊原高等女学校

終戦の年の菊組卒業生二十名は

卒業30周年記念文集『きみかげ草』を片手に、幾多の思いをこめて北海道定山溪に集まった。

三十年の道程は長かったが、
わずかに残る幼な顔に
みんな我を忘れて再会を喜びあった。

私たちは、すでに年老いたが
北国の濃霧と厳寒の中で幾星霜樺太開拓のためにつくした両親を共通にもっている。

アイヌ人の言語学者知里真志保先生は私たちのクラス担任でもあった。

昭和50年8月4日定山溪、溪流荘にて樺太庁豊原高等女学校生徒奥山真記す

登別郷土博物館知里先生展示コーナーを見学して「知里先生の思い出集」を作成

登別郷土資料館が開館した昭和56年11月7日、虎杖浜のホテル「いずみ」で同窓会をもち、藤江みどりさんの案内で登別郷土博物館を見学、知里先生のコーナーをも見学したが、豊原高等女学校時代の写真も思い出の原稿らしきものもなかった。あったのは前述の山口真が寄せ書きの拙文に書いた文章のみが縦90cm横180cmの用紙に書かれていただけであった。そこで知里先生の思い出の文集を作ろうということになり、原稿を集めた。出版までその労をとったのが小林和江さんと吉田秀子さんだった。その中には菊組生徒11人の知里先生の思い出と特別寄稿をしてくださった知里先生の樺太時代の共同研究者で樺太庁病院耳鼻科医長和田文治郎先生夫人、令嬢、父が知里先生が室蘭中学在学中保証人であった吉田マサさんの思い出が載っている。これは恐らく唯一の知里先生の樺太時代の面影を偲ぶ貴重な資料である。

「卒業50周年記念文集」の作成

昭和20年3月卒業以来、樺太で第2次世界大戦に巻き込まれ、地上戦、抑留、引揚、引揚後の生活の自立、結婚、子育ての50年にわたる菊組のクラスメートの軌跡文集である。平成7年5月、和田泰子さんはじめ、5人の幹事役の人々が作ってくださった。高齢社会とはいえ私達はすでに68歳。時折これを開いては豊原高女の少女時代と重ねあわせながら何時までも元気で生きようねと語りかけている。

知里先生が樺太で私達を教えながら滞在されたのは2年8ヶ月。先生の52歳の人生の0.5%に過ぎない。私達は13歳～15歳の人格形成期の少女時代であった。

第2次世界大戦中にも拘らず、先生から受けた格調高い、物事の本質を見極め追求する学習の姿勢は私達の胸に深く刻みこまれ、その後の私達の人生の誇りとして、現在も力づけている。

しかしこの時期は知里先生にとっては北海道でのアイヌ語のフィールド・ワークを終え、樺太アイヌ語への研究に情熱を燃やし挑戦された希望に満ちた年月であったかもしれない。給料もよかったし、高等官舎での楽しかった家族生活は先生の人生の最も輝かしい時期のようにも思える。

6. むすびに代えて 現代と知里先生の偉業

(現代)

知里先生が亡くなられて48年、社会および先住民族を取り巻く環境は時代と共に大きく変化した。まずIT時代の到来である。5万にもおよぶ知里先生のカードの整理、編集、執筆はコンピューター技術によってその労力は非常に軽減されるであろう。32巻の British Encyclopaedia は2枚のCD-ROM に入っている。

2007年9月国連は「先住民族の権利宣言」を採択し、人種差別や植民地主義の反省から生まれた新しい人権の概念を提示した。日本政府は昨年6月(2008)アイヌ民族を先住民族として認める決議を行い、これにもとづいてこれまでのアイヌ政策をさらに推進し、総合的な施策の確立するための「アイヌ政策の在り方に関する有識者懇談会」を開催している。また一方北海道・G8洞爺湖サミットに呼応して「先住民族サミット」アイヌモシリ2008が北海道平取で開催され、外国から、ガテマラ、アメリカ、ニカラガ、ニュージーランド・オーストラリア、ノールウェイ等12カ国から22人の先住民族代表が参集し、各先住民族が置かれている環境と政策について報告、討論し、日本政府およびG8洞爺湖サミットに先住民族サミット提言を提出した。

2008年は国連が提唱する「国際言語年」であった。ユネスコは国連大学(東京)との共催により2008年8月、国際会議「グローバリゼーションと言語一豊かな文化遺産を守るために」を開催した。開催趣旨はグローバリゼーションにより、世界はますます小さく、同質化されたところとなっているが、多種多様な言語が使用されることで、以前と変わらぬ豊かさや多様性がもたらされ、いたる所で言語を保存することが非常に困難になってきている。言語が消滅すれば知識の伝達が途絶え、過去を学び、過去とのつながりを持つ機会も失われてしまう。

相互理解、平和構築、尊重、多様性など、現代において最も重要な価値の多くは、言語において具現化されている。言語は、単純には、基本的な日常生活を送るのに役立つものである複雑な形で用いられ、社会の中の、あるいは社会間における私達の役割を定義するために使用できるものである。

現在ユネスコでは2000年から「消滅に瀕した世界の言語地図」(Unesco's Atlas of the World's Languages in Danger Disappearing)を調査し、その記録と保存に努めている。その中にはアイヌ語も記載されている。また言語保存のための実践事例集(Good Practice in Language Preservation)をネット上に公開する事業も行っている。

(知里先生の偉業)

1. グローバル化のなかで滅び行く民族の文化と危機言語の先駆的研究と保存と伝承(世界無形文化遺産)、先住民族、アイヌとして生まれ、滅びつつある自分の民族文化の探求に情熱をそそぎ、文字を持たないアイヌ民族の言葉を大集成し「分類アイヌ語辞典」を世に送り、世界の人とのコミュニケーションの道をひらいた。

アイヌ研究はこれまで、研究者自身の研究する文明社会の考え方に基礎をおいたもの、「外から見た」研究であった。が、未開社会における「外からの思惟」を絶した考え方や、アイヌ自身のものの見方に純粋に突き入ったのが、知里氏の研究の、他に比類のない特色

の一つである。

2. 文化の多様性と対話の発展

先住民族としての人種差別のなかで常にアイヌ人としての誇りをもち、北海道大学はじめ、また多くの大学でアイヌ語、文化、社会等文化の多様性について講義すると共に地域社会におけるアイヌ文化に関心をもつ人々とフィールドワークや共同実施し、またNHK等の研究取材に参加し、文化の多様性と対話を積極的に指導した。

3. グローバル社会における先住民族としての生きるモデル

人種差別のなかで、自身の鋭い直感力と豊かな想像力に加え、自ら先住民族としての誇りをもって一生を貫き、その生活と生き方は日本人の間に尊敬を集めている。このことは人種差別、人権問題の解決ならびに世界のグローバル化における先住民族の生き方のモデルとして政策立案に示唆を与えるものと私は考える。

参考資料

樺太基本年表 北海道総務部行政資料室 昭和46年5月

樺太教育発達史 高田銀次郎編 樺太教育会発行 昭和11年8月

「鈴蘭第21号（複写）」 樺太庁豊原高等女学校校友会発行 昭和16年3月

知里真志保先生の思い出（非買）菊組有志 昭和60年

戦争の記憶から 17歳の太平洋戦争 奥山真著 展望社発行 2004年7月

国境の植民地・樺太 三木理史著 塙書房発行 2006年5月



スキー行軍（冬季体育授業）